

I. はじめに

a. 発達を考える(系統、固体、環境発生論)

- 系統発生 ; 種の進化 : 動物界で他の哺乳類と比較すると、人間は未熟状態で生まれる
 - : 生物学的には人間にとって、かなり過酷な状況に誕生するが、あらゆる状況に可能な変更を屈指し与えられた環境に適応する
 - : 人間の知性の発達条件
 - : フロイト: 人間が絶対的な未熟状態で誕生することが、道徳にまつわる全てのことに通じている
- ; 性生活 : 動物界では子育て期間は交尾はなく、子がいなくなるとオスメスが結びつく
 - : 人間に関しては、性生活と親役を同時にこなせる
 - : 人間は交尾に関して性器だけではなく、身体の様々な部分が性感領域として、柔軟に機能している
 - : フロイトの幼児性愛の理論の誕生: 母子関係に由来する子どもの性の発達理論: 口、肛門、尿道、性器
- ; 愛着 : ボウルビーは1958年に母親の存在を軸に、子どもから母親へ、母親から子どもへの行動パターンに人間固有の5つの行動特性を発見: 吸う、抱きつく、ついて行く、泣く、笑う
 - 1969年: 愛着は、ロレンツが哺乳類の子どもの行動観察で“刷り込み”と名付けた現象に似ていて、母親の側にいることを目的とした子どもの制御行動であり、動物に比べるとその期間は長く1月半から始まる。9ヶ月を過ぎると困難さが生じる
- ; 発達理論の課題: 個別の要素と遺伝素因の混在
- 個体発生 ; 個別な遺伝情報に基づいた個人の発達
 - : 形態学的形成: 3ヶ月で脳の個別化、その後、重さと体積が増え、表面に1次2次3次としわ(sillons)が形成される
 - : 出生時、全体的に成人脳に近いが、前頭葉と側頭葉の発達は遅い
 - : 3次形成が終わっていない
 - : 1年目の脳の体積の増加は、1年目から成人期に至る増加よりも多く、頭囲が大きくなる
 - : 出生時、ニューロンの基本形は出来上がっており、9ヶ月以降に新たなニューロンは出来ないが、ニューロンの接合は継続的になされる
- epigenetic ; 環境との複雑な要素と個との相互関係で形成されていく個人
 - : 心理-運動、知性、言語、情緒の発達に関係する
 - : 野生児についての体験より、人間の精神性には人間環境が必要で、他の環境では発達の限界がある
 - : 環境から及ぼされる刺激、感覚、認知、情緒など学習に必須
 - : 発達に必要な刺激が不足すると、それによって形成されるはずの機能が成り立たない: 聴覚障害の子どもは、すぐに話すことが出来ない
 - : 人間環境そのものに、人間に必要な発達促進的の刺激があるという考え方こそ、精神分析の貢献である
 - : 精神分析は、特に母子関係、親子関係に着目し、人間の精神性の発達と形成に関わる構造を根本原理とした

b. 人間の資質(五官、五感、運動系、遺伝、言語)

- 神経系、内分泌系、免疫系; 成長発達は、3つのコントロールシステム下でエネルギーの安定システムであるエントロピーの増大を防ぐホメオスタジスによって維持されている。
- 動的平衡システムにより、実存的現在性としての身体は、循環的刷新を繰り返し行っている。(福島?)
- 肉体性; 欲動と情動そのものとしての体で、死の対象となり腐敗し消滅する肉塊
- 身体性; 他者との相互性により形成、統合されながらイメージ化され、言語の領域に属する体

1. 五感・五官・動的・遺伝的・言語的身体

→身体感覚、動的な身体、言語的存在と機構化、機能化（役割機能）、組織化、構造化

- ・体性感覚＝皮膚：触覚、温痛覚、圧覚、固有感覚は皮膚、筋肉、腱の感覚器を通して受け止められ、脊髄を上行し視床から両側頭頂葉の一次体性感覚野に送られる。固有感覚は小脳と結びつき、運動の調整をする。
- ・味覚＝舌：甘味、塩味、酸味、苦味、うま味の化学物質で感知され第7-9-10脳神経を通して大脳に送られる。
- ・視覚＝目：光を感受した網膜細胞の興奮は視神経（第2脳神経）を經由し視床に送られる。外側膝状核は色や形などに信号を分け、後頭葉の一次視覚野に情報を送る。視床下部にある視交叉で左右からの視神経は二分され、右からの光は左脳へ左からは右脳へ送られる。一次視覚野から連合野に送られる情報は、物体の認識に関しては側頭葉で処理され、図形など空間の識別は頭頂葉で処理される。
- ・聴覚＝耳：音信号による感覚細胞の興奮は、内耳神経（第8神経）を経て脳幹（内側膝状体）から両側側頭葉の一次聴覚野に送られる。音刺激は、右耳からの音は左脳へ、左耳からの音は右脳へより強く送られる。新生児の聴力は、誕生前に80%ほどとも言われている。内耳には前庭と半規管があり、平衡感覚器として機能し、リンパ液が引力や動きによって管内を動くことで感覚細胞が興奮し、その情報を脳幹、小脳に送ることで感知される。傾き、移動の感覚。
- ・嗅覚＝鼻；匂いも化学物質で感知する。匂いは鼻腔上部の粘膜の嗅覚器から直接に側頭葉の梨状皮質に送られる。梨状皮質は海馬とともに記憶のセンターでもある。嗅覚、味覚は古い感覚器で乳児期に記憶されてしまう。
- ・神経系；中枢神経、末梢神経、自律神経からなる。
- ・中枢神経；大脳、脳幹（間脳、中脳・橋・延髄）、小脳、脊髄の4つの部位からなる。：大脳は、表面が皮質と呼ばれる神経細胞の集合体で、全体の40%を占める前頭葉、頭頂葉、側頭葉、後頭葉に分割されている。：大脳皮質は、五感からの情報を受け取る一次感覚野と、その情報を記憶理解につなげ反応回路を作る新皮質とも呼ばれる連合野、反応を組み立て送り出す一次運動野とそれを調整する連合野からなる。ヒトだけが持つ連合野は新々皮質とも呼ばれる。：脳は、体重の2-3%で1500gほどの重さで、心臓から送り出される全血液量の20%を必要とするエネルギーを最大に消費する器官である。：脳は、血液脳関門というバリアーを作り、ブドウ糖やアミノ酸などごく一部の物質しか通さない。：大脳は、表層は神経細胞の集合で灰色。内部は、情報を伝える神経線維で白色。深部中央には基底核の神経細胞の集合があり、運動の調節や一部の記憶に関わっている。：大脳は、左右半球に分かれ神経細胞である脳梁で結ばれている。脳梁により情報は瞬時に相互交換され協調活動がなされる。：間脳は、脳幹の最上部にあり大部分は視床である。視床は身体からの全ての情報を集め、脳に適切に配分している情報配分センターである。間脳周囲の古い皮質で古い神経細胞で組織されている扁桃核、帯状回、海馬は、大脳辺縁系と呼ばれ快-不快、怒りや恐怖、記憶や性欲などの情動や本能のセンターとなっている。：間脳を除く脳幹は、上部から中脳、橋、延髄で、生命維持センターである。意識、呼吸、心拍などの機能を統括する。意識の機構は脳幹網様態賦活系と呼ばれ、覚醒と睡眠がコントロールされる。：小脳は、運動や姿勢のコントロールセンターである。大脳で学習された運動は小脳に保存され、効率的に利用される。：脊髄は、脳と抹消を結ぶ連絡路で、大脳の中枢神経が脳からの指令を受け末梢神経と切り替わる部位は脊髄の前角部にある。
- ・末梢神経；感覚器や皮膚・筋肉からの情報を中枢に伝え、また中枢からの指令を抹消の筋肉系に伝える。ヒトでは、脳幹から左右12対の脳神経系の末梢神経と脊髄からは左右31対の脊髄神経の末梢神経が全身に分布している。脳神経系は、視覚、聴覚、味覚、嗅覚などの感覚器と脳を結ぶ。脊髄神経は、四肢・軀幹からの感覚情報を脳に伝え、また中枢からの指令を筋肉に伝える。脳に向かう末梢神経は感覚神経（求心性神経）と呼ばれ、中枢から末梢に向かう末梢神経は運動神経（遠心性神経）と呼ばれる。
- ・自律神経；自律神経の中枢は、視床の下にある視床下部と延髄にある。自律神経は交感神経と副交感神経からなる。体内状況を感じし外界の変化に対応する。交感神経は身体を興奮や緊張の状態に、副交感神経は安静と回復の状態にする。これらの反応はシナプスという神経細胞の情報伝達でノルアドレナリンやアセチルコリン等の神経伝物質を介して行われる。視床下部は内分泌系の機能を、延髄は呼吸・血圧・心拍等の機能を統括する。
- ・内分泌系；内分泌とは、各種の腺（内分泌腺）がその分泌物（ホルモン）を導管によらず、直接体液（血液）中に分泌すること。その分泌物（ホルモン）は腺細胞から直接血液中に

放出され、細胞の機能を維持する。内分泌腺のおもなものは脳下垂体（成長ホルモン）、甲状腺（細胞代謝を高める甲状腺ホルモン）、松果腺（睡眠誘導をするメラトニン）、胸腺、副甲状腺（血中カルシウムを上昇させるパラカルモン）、副腎（副腎皮質；電解質の調整、血糖値の上昇、ストレス抵抗。副腎髄質；心拍促進、血圧上昇）、ランゲルハンス島（グリコーゲンの分解をするグルカゴン、グリコーゲンを細胞内貯蔵するインシュリン）、精巣（男性ホルモン）、卵巣（女性ホルモン、黄体ホルモン）、胎盤、腎臓、その他唾液（だえき）腺、胃、十二指腸などにも内分泌機能が認められる。

- ・免疫系；生体が自己と自己異和性である異物を識別し、生体の生命維持の為に異物を排除するメカニズムと機構。

異物とは、病原体や外来物の生体への影響や進入及び生体自己変性たんぱく質である抗原を意味する。この抗原が、生体メカニズムの作用で認識されると、生体防御機構としての免疫が発動される。生体防御機能は、直接的に抗原に作用する細胞性免疫（マクロファージ、リンパ系細胞）と抗体を産出し体液中に放出する体液性免疫（液性免疫）がある。抗原の侵入に対し免疫メカニズムが作動する現象を獲得免疫と呼ぶ。生来的に組織化されている免疫機能は自然免疫と呼ばれ、自然抗体や非特異的なナチュラルキラー細胞の働きなどを指す。免疫機能とその機構から得られる効果は、2度目の抗原に対する抗体反応で組織・機能化が生体反応として学習され、大量の抗体の産出が速まってくる。

免疫反応には生体認識メカニズムの誤作動もあり、自己/非自己の誤認や過剰反応による生体危機状態もあり、前者を自己免疫不全症候と呼び、後者をアレルギーと呼ぶ。

- ・前庭覚、固有受容覚、触覚、視覚、聴覚

→身体感覚、動的身体、言語的存在と機構化、機能化（役割機能）、組織化、構造化
→一卵生双生児の発症一致率とアプリアリな不一致率環境要因と個別差別化の現象

c. 母子関係

→ウィニコットの着想とそれを超えるもの；初乳の論理的体験としての位置づけ
→object presenting, holding, handing, と母子関係の構造的な理解
→ラカン理論による大文字の他者概念の導入
→親により想像の対象として位置づけられる子ども
→母の欲望と直接的関係に構造的な位置付けになる子どもの存在
→母の欲望の対象であるファロスの対極に子どもは構造的に位置付けられる

II. 母胎

a. 胎児段階(母胎理論の原型)

父親にも母親にも胎児の存在は精神機能を自然に作動させる無意識の対象となる



→ロジャスの立場；自己一致、無条件の積極的関心、共感＝心身響鳴共同体験
→ラカン理論；想像的なもの、幻想

b. etre-la ,Da sein, 現存の根源的意味

Analyste の無欲で中立的な在り方のある側面

c. 言語的構造と胎児存在の構図

言語によって象徴される不完全な母胎(宇宙)と実存

→教育の意味；子どもの発達に伴い広がっていく世界を言語によって象徴的に捉える作業
；去勢（法・掟・法則）による相互安全保障の理解
→欲望（欠如）の所在の確認＝無意識の構図と論理的構造としての存在
；理想化された世界を開く万能的対象
；不安を肥大化させる未知なる対象

III. 個体と外界

a. 誕生

①生態プログラムと母子の共同（働）作業

・ファンタスムを超えた（不安の介在する余地が限りなく希少な）現実的体験

- ・赤ん坊は、母なる大文字の他者の言語的世界である象徴界に抱えられ、現実界そのものとして在る
- ・大文字の他者として赤ん坊にとって象徴界に在る母親は、赤ん坊を対象化し想像界にも在る

②自己感覚と自己意識

自己存在の2つの極

- 意味としての存在（妄想）＝他者としての迷路
- 実存としての存在（幻覚）＝原始的再生
- ＝象徴界に不在の対象
- ＝他者からの逆語り

③フロイドの科学的論説

- ・ニューロン回路 刺激－興奮の論理
- ・刺激抑制網と生体保存の原理
- ・緊張（不快）と緊張解放（快）の論理
- ・抑圧と無意識＋原抑圧

④母子関係の基本的考え

- ・ウィニコットの次元＋論理的初乳（根源的他者の現存、Das Ding）
- ・記入された快刺激の幻覚的再現
- ・快・不快の原則
 - 反復強迫と Fort—Da＝大文字の他者不在へのシニフィアンによる構造化
 - 不快を強いられる受動的状況への主体の能動的遊び
 - 糸巻き⇒母＝換喩/糸⇒対象との連続性の保障＝隠喩
- ・他者（母）の欲望と赤ちゃんの関係図式
 - 母・子どもの存在を通して論理的に開かれる母の欲望の現前・論理的に開かれる母の欲望の対象となる絶対的な完全な対象＝Φ・子どもの存在

⑤「我」「己」をめぐる恒常的展開と記述

- ・自体愛から自己愛を経て我へ

b. 無我から有我へ（現存から実存へ？）

①刺激と原我

- ・刺激（不快）と自己意識（目覚め）
- ・記憶痕跡としての刻み（印し）と我の作用
- ・原我の体験図式
- ・刺激抑制網と生体保存の原理
- ・抑圧と防衛と自己保存
- ・シニフィアンの概念の導入
- ・シニフィアンの二重性 — 1. 物質的 2. 言語的

②快・不快と在・不在

- ・母子関係の弁証法
- ・えい児・新生児・赤ん坊は幻覚す
- ・心地良い対象（一次対象）の精神機能による再生（無意識的体験と夢）
- ・不快刺激・不快体験を抑圧することにより代理物を表象する

③遊び

- ・一次対象不在の再現
- ・心地良い自己感覚の再現
- ・一次対象不在の代理（感覚的幼児玩具）
 - ⇒感覚対象＝自閉対象（？）
- ・ストーリー（テキスト）への登場による再現
- ・メタファー化
 - 在・不在の弁証と Fort/Da
 - 抑圧と言語シニフィアン

c. 欲動について

- ・主体の最も深いところで働いている、主体の機能に必要な不可欠な基本的エネルギー
- ・欲動とは、自己の存在を持たない主体が、対象物によって存在を得ようとする機制
- ・フロイドは、欲動の構成を「起源」「対象」「目的」「圧力」の四要素として定義した
- ・欲動の結末は、「反転」「向け換え」「抑圧」「昇華」等と決定される

フロイトの欲動概念の歴史

- ①欲動概念の理解の落とし穴
 - ; 人間が持つ動物的本能として心理学的な理解に陥ってはならない
 - ; 臨床的現象に直接的に結び付けられない
 - ; 転移の操作、治療の方向付け、精神分析の技法についても直接的な帰結をもたらさない
- ②欲動理論の重要性
 - ; 欲動は、エネルギー概念として理論化され、分析理論の中核である
 - ; フロイトは、「欲動についての理論は最も重要な問題であるが、また同時に精神分析の学説の中で最も未完のものである」と書いた
 - ; J. ラカンにおいては、欲動は、無意識、転移、反復とともに精神分析の四つの概念をなすもので、最も注意深さを必要とするもの
 - ; 主体の欲望の特異性が把握される極限の点でもある
- ③1905年「性欲論三篇」
 - ; はじめて、欲動という用語を使用する
 - ; 1890年代から、「何が人間存在に生きる力を与えているのか」
 - 「何が神経症の症状構築に力を与えているのか」
 - ↓
 - 身体的性的エネルギー、心的性的エネルギー
 - ↓
 - リビドー

d. 現実検討とその基本的考え

- ①思考同一性
- ②知覚同一性
- ③自己感覚を軸とした意識存在

IV. フロイト的発達段階

a. 口唇期

- ①口による世界観
- ②禁止の取り入れ（口唇期去勢）
- ③去勢による創造性の確保
- ④一次対象喪失
- ⑤連続感覚の保証
- ⑥口愛サディズム
- ⑦アンビバレンツ

b. 肛門括約筋（肛門期）

- ①基本的社会的自立体験
- ②対人関係レベルでの支配－被支配
- ③自己管理・達成への満足
- ④他者からの評価による満足
- ⑤肛門サディズム、攻撃性
 - ・火との関連；オムツ離れの可能になった子どもが消防車の話を聴いて、その夜お漏らしをする：尿道
快楽と消火（放尿）：放火と退行型肛門期サディズム
- ⑥マゾヒズム的満足
- ⑦肛門期去勢（禁止による秩序の取り入れ、自・他の区分け）

c. 性期段階

- ①自己同一性の確立
- ②父に代理される超自我の取り入れによる自己の理想化の実現と同一性の確立
- ③量的満足から質的満足へ
- ④量的満足につながる自己愛対象の喪失
- ⑤意味としての自己（自己像）の確立
- ⑥抑圧と創造力（無意識こそ創造性への原動力）

d. 同一性

- ①原父殺害による同一化；トーテムとタブー：父を食ベトーテムを表す：体内化による取り入れ型同一視と畏怖の念＝禁止・掟の成立
- ②超自我として機能するリーダーへの同一化；を部分的にリーダーの表象するものをモノを取り入れ、同一視する（フロイト；集団と自我）。
- ③ヒステリー性の同一化；大文字の他者の欲望への同一化

e. 自己同一性といわれるもの

- ・感覚同一視；自閉対象と自己感覚へ至る感覚野による同一視
- ・鏡像段階による想像的鏡像他者への同一化（自己愛性同一視）と疎外
- ・想像的同一視；理想自我への備給の対象となる対象に同一化：去勢不安の回避的同一化：自己愛対象へのしがみつき＝対象喪失へのあがき⇒迎合と競合と疎外
- ・自我の構造；自我とは、喪失した対象を自らの欠如した自己像として体験するか、理想自我に自己愛的にしがみつき、去勢不安を生きるか去勢不安の解消と錯覚しながらの限らない同一視の体験の集積⇒不完全な私との出会いか否認＝去勢の内面化か想像界への埋没か⇒ハムレット的問い「生きるか死ぬか」
- ・去勢の内面化；大文字の他者のメッセージを「お前とは〇〇〇である」と受け取り、語る主体として生きる在り方に到達する。⇒想像界から抜け出し象徴界を大文字の他者として生きることとなる。

V. 理想自我と自我理想

a. 理想自我

- ①量的満足
- ②想像的満足
- ③根源的喪失対象へのしがみつき＝不可能性の否認
- ④ナルシズムの二重の備給

b. 自我理想

- ①質的満足
- ②象徴的（言語的）存在としての満足
- ③対象喪失→退行的自己愛対象の喪失
- ④自我に備給されうるナルシズムの原理→可能性に向けての向上（可能な理想像）

c. 断念（去勢の内面化）

- ①ファロスをめぐる苦悩
 - ・裸の王様
 - ・理想と現実
 - ・イメージ（想像的なもの）への張りつき
 - ・俺かお前か？＝葛藤
- ②所有原則⇒ペニスの畏
 - ・知識と知
 - ・持っているか、持たないか
 - ・量⇔所有 Avoir
 - ・質⇔実存化（欠如主体としての）etre
└→語る主体としての実存
- ③私に言語的に宿る身体
 - ・身体図式
 - ・身体像
 - ・実存からイメージ（イメージ）を経て象徴的言語として立ち上がる身体
 - ・他者からの領域の身体から他者としての身体へ
→因果としての身体⇒言語的に統合
- ④不連続から連続へ
 - ・自己感覚の維持の切断による自己意識の覚醒としての不快（不安になる緊張も含め）が抑圧されずに、他者の体験として言語的領域に自己一致の形式で連想される
→フロイド的無意識の活用：夢、失策行為、言い間違い、健忘、症状 ⇒ 対象 a との相関
 - ・反復形成からの解放
→言語環境による連続性保時（語られる／語られない）

⑤去勢とは相互安全保障

- ・誇らしい私の登場
- ・失敗は成功の元
- ・無欲なる欲
- ・死の内面化から死する（すべき）者へ
- ・何でも有り
- ・ $-\Phi$ とは論理的 Φ を主体に提示し、Loi（法）を他者として提示する
- ・自由と勝手
- ・自由なる不可能を背負った創造者へ

VI. おわりに

- a. 人間共存の条件
- b. 人は自らが自らによって裏切られている
- c. 平和とは自己を尊重する愛に基づいた他者の尊重
- d. 何も恐れるものはない
- e. 人間様からただの人へ